

一九九五年の御着任以来、二二年の長きにわたり専攻（学域）・専修の教学に御尽力くださった中川成美先生が二〇一六年度で定年退職を迎えられた。一月十八日には定年退職を記念する最終講義が創思館カンファレンスルームで開催され、修了生・卒業生をはじめ在学生、教職員が講義を拝聴した。最終講義は修士論文から現在の御研究までを振り返り、今後を展望するものであった。プロレタリア文学からはじまり、ジェンダー文学、トラベルライティング、基礎資料の作成、海外学会との連携・研究交流に至るまで、その多岐にわたる業績に圧倒された。また、多岐にわたる研究を授業においても展開され、それが受講生の研究、学位、著書へとつながっていることを改めて確認することもできた。中川先生の研究、教育の全体像を何うことのできる最終講義であり、教員にとって非常に刺激を受けるものであった。なお中川先生には、本年四月以降も特任教授として専攻（学域）・専修の教学に引き続き御尽力いただいている。

○ 近年、学術論文のオープンアクセスが進んでいる。科学技術・学術審議会学術分科会の学術情報委員会における審議のまとめでは、研究成果を原則公開し、広く社会に活用されることを研究者が基本理念として共有することが求められている。また大学教員等の公募では論文等の引用実績（例えば Google scholar 等で得られる引用数情報）を示すことが求められる場合も出てきている。

このような学界の状況を考えると、『論究日本文学』についてもオープンアクセスを進めることが必須であり、それが会員の大きな利益につながると考えられる。そこで、二〇一六年度総会に『論究日本文学』のオープンアクセスを提案し、御承認いただいた。その後、編集長の内藤由直先生を中心に許諾依頼が、赤間先生を中心に各論文のPDF化が進められた。順調にいけば、『論究日本文学』一〇六号がお手元に届く頃にはウェブでの公開が始まっていると思われる。

オープンアクセス化は、会員の研究成果を国内だけでなく、広く世界に発信していくことにつながるものである。国際的な発信を強化するために、今後、例えば論文に英文タイトルや英文要旨を付けることなども検討していきたいかもしれない。

なおオープンアクセス化に伴い、二〇一六年七月二日付けで投稿要領を一部改定した。会員の皆様には本会ウェブサイト、又は『論究日本文学』最新号で御確認いただきたい。

今後も学界を取り巻く状況に対して十分注意を払い、会員の研究成果が学界だけでなく広く社会に知られ、共有されるような方策を適切に講じていきたい。

（小椋秀樹）